



「境界に立つこと」 : フーコー「啓蒙とは何か」についての試論

小嶋, 恭道

(Citation)

愛知 : $\phi \iota \lambda \omicron \sigma \omicron \phi \iota \alpha$, 27:3-14

(Issue Date)

2015-12-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010335>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010335>



「境界に立つこと」

——フーコー「啓蒙とは何か」についての試論

小嶋 恭道

1. 序

長期間にわたる権力概念の研究を経て、晩年のフーコーは「自己」あるいは「主体」の領域の研究を極めつつあった。昨今は、晩年のフーコーがコレージュ・ド・フランスで行っていた講義録も出揃い、その研究も盛んに行われている。そして、フーコー晩年の思想は、しばしば「権力への抵抗」として彩られ、ある程度広まったと言えるだろう。しかし、晩年のフーコーの思想は、何らかの事象に対して、単にノーを突きつけるものとしては処理できない側面を持っている。こう言ってよければ、イエスでもノーでもない立場として理解されるべき思想として読まれるべきものなのだ。

本稿では、このイエスでもノーでもない立場に立つフーコーの思想を、フーコー最晩年のテキスト「啓蒙とは何か」(1984)⁽¹⁾を中心的な題材とし、カント、ボードレールのテキストを頼りにしながら描き出すことを目標とする。同テキストのフーコー自身の言葉にもあるように、フーコーの思想は、「境界に立たなければならない (il faut être aux frontières)」⁽²⁾という観点から理解されねばならないものなのだ。そして更に、本稿は、ここから導出され得る「啓蒙」の条件としての「子供への回帰」なる観点を描いてみたい。

2. 啓蒙と現代性

フーコーの「啓蒙とは何か」というタイトルは、見ての通り、カントの「啓蒙とは何か」(1784)⁽³⁾のタイトルを転用したものである。勿論のこと、カントの「啓蒙」を一つの主題としながら、言葉が紡がれていく。しかし、その内容は、言わば、カントの思想をアップデートしたものであり、単なるカントの「啓蒙」の解説ではない。同テキストで、フーコーはボードレールの「現代生活の画家」(1869)⁽⁴⁾の「現代性」の概念と「啓蒙」を引き合わせながら、自身の思想を語る。以下、カントの「啓蒙」と

ボードレールの「現代性」を整理する。

(a) 啓蒙

周知の通り、カントにおける「啓蒙」の意味するところは、「未成年(Unmündigkeit)からの脱却」である。カントの「啓蒙とは何か」において、「未成年」とは、他人の指示を仰がなければ自分の悟性を使うことができない状態を指す。また、「未成年」という言葉には、自ら考えることへの怠惰、臆病などの性質も含まれる。しかしやはり、最も重要な概念は、理性の「公的使用(öffentlichen Gebrauch)」と「私的使用(Privatgebrauch)」であろう。当然のことながら、フーコーもまたこの差異を重要視している。

私は、理性の公的使用という言葉の下で、ある人が**識者**として、一般の**読者**全体の前で彼自身の理性を使用するということを理解している。また、私的使用というのは、**公民**としてのある地位、あるいは公職に任じられている人は、その立場において彼自身の理性を使用することが許される、ということを目指している（強調原文）。⁽⁵⁾

カントは様々なところから、「議論をするな(Räsonniert nicht!）」という言葉を聴くと述べている。議論するな、教練せよ。議論するな、納税せよ。議論するな、信じろ。……。我々は、一般に、利害関係を旨とする公的な領域においては議論や批判をする余地はなく、自身を受動的であると考え、決まりに従順に従うことが「決まり」で、それが正しいことだと考えがちである。そして「私的な領域」においては自由に振る舞っても良いと思っている。ところがカントは、こうした理解には従わない。彼は、公的な職務に就いている者でも、議論すべきだと説くのである。確かに職務を引き受けている点では受動的なのだが、議論をすることはいっように差し支えない。そしてこの一方で受動的、他方で能動的に議論することこそ、「理性の公的使用」を特徴付けるポイントなのである。カントの市民と納税の例を引用してみよう。

市民は、課税の納付を拒否することはできない。ましてや納税の義務を果たす場合に、課税に対してでしゃばった批判をすることは、(中略) スキャンダルとして罰されてよい。それにも拘らず、彼が識者として、その課税が適正と公平とを欠くことに反対する見解

を公表することは、市民としての義務に反するものではない。⁽⁶⁾

以上がカントの言う「公的使用」・「私的使用」の差異である。「公的使用」を行うような態度において、ひとは未成年から「脱出」する、とカントは考えている。

(b) 現代性

続いて、ボードレールの「現代性」についても簡単に整理する。ボードレールが「現代性」という言葉を用いたのは、ほとんど「現代生活の画家」に限られる⁽⁷⁾。もちろん、その概念の示す内実が前後のテキストにも見られるわけだが、明確にこれを論じているのはこのテキストだけである。この小さなテキストで述べられた「現代性」なる概念とは以下に概説する。まずは、ボードレールの言葉を引く。

このようにして、彼は行き、走り、求める。何を？勿論のこと、この男は、(中略) 活発な想像力に恵まれ、常に人間達の大砂漠を過って旅をするこの孤独の人は、純然な遊歩者より一段と高い目的を、巡りあわせの移ろい易い快樂とは異なる、より一般的な目的をもっているのだ。彼が求めるそのなにかを、**現代性(modernité)**と呼ぶことをお許し頂きたい。というのも、そうした観念を表現するのにこれ以上に相応しい言葉を示すことができないからだ。彼にとって問題なのは、**流行(mode)**が歴史的なものの内に含みうる詩的なものを流行の中から取り出すこと、一時的なものから永遠を取り出すことなのだ(強調原文)。

(8)

ボードレールの「現代性」の概念は、阿部(1995)が述べるように、「基本的には、時代概念であって、様式概念ではない」⁽⁹⁾。さらに、カントの啓蒙の概念のように、「哲学的・政治的な領域」において述べられるのではなく、「美学的な領域」で用いられる言葉である。従って、まず「美学」の問題として概念を整理する。元々、ボードレールが企てたことは、「唯一絶対美の理論に反して、美に関する合理的で歴史的な理論」を打ち立てることである。その美についてボードレールは次のように言う。

美というものは、その量を測定するのが度外れに難しい。永遠、不変の要素と、相対的、偶成的要素から成り立っており、後者は、言ってみれば、代わる代わるあるいは全部まと

めて、時代、流行、道徳、情熱である。⁽¹⁰⁾

ここから、ボードレールが考える「美」には「永遠、不変の要素」と「相対的、偶成的要素」の二つが不可欠であることがわかる。先ほどの「現代性」に関わるテキストと合わせて考えれば、ボードレールの賞賛する「現代(moderne)の美」、「現代性」は、「流行＝一時的なもの」、つまり「偶成的な要素」に「詩的なもの＝永遠の要素」が含まれる状態のことを指す、ということが見てとれる。ここで言われている「歴史的なもの」とは、阿部(1995)が述べるように、「異なる時代のそれぞれ特有な一時的なもの」⁽¹¹⁾と解されるのが妥当であろう。「偶成的要素」、「永遠の要素」、両者は確かに互いに区別されるが、切り離し得ない。「現代性」は「一時的なもの」なしにはあり得ないのだ。宮川(1962)はボードレールに即して「理想」とは、「美」とは、そのように絶対的なもの、あらゆる時代を通じて永遠なものではない。あらゆる美、あらゆる理想は永遠なものと同時にうつろいゆくものを、絶対的なものと個別的なものをもっている。いやむしろ、絶対的な理想、永遠な美は実在しないというべきだろう⁽¹²⁾と述べている。また、さらに一般的に、湯浅(2009)は、「ボードレールはそれ(真なる存在)に意義を唱え、真に存在することはむしろ移ろいゆくことにある―絶えず変化し、生成してやまないことにある」(括弧内は筆者)と述べている⁽¹³⁾。

以上が、「現代性」の簡単なまとめである。基本的にフーコーもこの理解から逸脱することはない。では、フーコーが、カントとボードレール、時代も異なり、一方では哲学・政治的領域の概念、他方は美学上の概念をいかに接続させ、共振させるかをみてみよう。

3. 再活性化・差異化

一見無関係に見える「啓蒙」と「現代性」の概念だが、フーコーは両概念を「現在に対する関わり方」、そして「歴史的な存在の仕方」、「自己自身の自律的な主体の構成」という三つの共通項で結びつける。語られた時代も、領域も、その意味合いも大きく異なる二つの概念は、これらの共通項を軸にした反復的概念なのである。

(a) 現在に対する関わり方、歴史的な存在の仕方

カントが「啓蒙とは何か」の中で思考していた「現在」は、フーコーによれば、人々

が属する世界の年齢のことで、徴を見て取る出来事でも、ある成就の夜明けでもなく、「昨日」から差異化された「今日」のことを指している。今日いったい何が起きているのか、そして我々がそれぞれ自分自身であり、私がこれを書いている場所であり地点であるこの「今」とは何か。つまり、カントはこのテキストを通して、自分自身の企ての現在性について反省を行いつついるのだ。フーコーは以下のように述べている。

確かに、一人の哲学者が、これこれの時期に、自分の仕事を企てる諸々の理由を与えるということは、これが初めてのことでない。しかし私には、一人の哲学者が、このように密接に、かつ内部から、認識との関わりにおける自分自身の仕事の意義(signification)、歴史についての反省(réflexion)、そして、自分が書く、そのときだからこそ書くという単独な時についての個別的な分析(analyse)、これらを結びつけたのはこれが初めてのことであった、と思えるのです。⁽¹⁴⁾

カントは、自分自身が「現在(présent)」と取り結ぶ関係性を明確にしようとしている、というのがフーコーの読みなのだ。カントは「啓蒙とは何か」のなかで、「自分自身で考える」ことの重要性を説いているが、その際、弊害となる「私のかわりに考えてくれる者」として「後見人(Vormünder)」をあげている。学者、牧師、医者、様々な後見人が存在するが、哲学者も例外ではないだろう。他人の代わりに理論や学知を構成し、これを真理として提示する。しかし、カントによれば、そうした人々は、他者に対して「自ら未成年状態のくびきを投げ捨て」、「自ら考えるということ」の重要性・価値を広めていくべきなのだ⁽¹⁵⁾。こうした態度は、哲学者が哲学者自身に向けた反省の態度として考えることができるだろう。フランス革命直前の時代のなかで、カントは哲学の普遍的概念を構築するのではなく、自らの役割は一体何か、今は歴史的にみてどういう時代か、自分がものを書こうとする「現在」とはどういうものなのかを考えていたのだ⁽¹⁶⁾。

カントの「啓蒙とは何か」から 80 年余り、コンテキストは異なるが、ボードレーもまた、「現代の美」という形で、「現在」について考えていた。すでに述べたように、ボードレーにとって、「現代の美」は「偶成的要素」と「永遠の要素」の混合物である。これを彼は「現代性」と呼んだのであった。ボードレーは、「流行」を毛嫌いし、過去にのみ執着する画家を嘲笑し、フロックコートや燕尾服といった「流

行＝私たちの時代の必然的な衣装」に目を向け、これに美を見出すスタンスを賞賛する（「現代生活の英雄性」）⁽¹⁷⁾。過去の権威にすぎるとは現代の美は計ることができない。「今」に美を見出さない態度を「大きな怠惰」であるとしながら、ボードレーは「現代生活の画家」のなかで以下のように述べている。

けだし、ある一時代の衣服にあってはすべてが絶対に醜いと宣言してしまう方が、そこに含まれるかもしれない不可思議な美しさを、それがどんなに軽微なものであろうと抽出して見せるべく骨折るよりは、はるかに都合のいいことだからである。（中略）昔の画家一人一人にとって、一個ずつの現代性があったのだ。前の諸時代からわれわれに残された美しい肖像画の大部分は、その当時の衣裳をつけている。これらの肖像画が完璧に調和のとれたものであるのは、衣裳、髪かたち、さらには身振りや眼差しや微笑までもが（どの時代にも、それぞれ独特の身のこなし、眼差し、微笑というものがある）、完全な生命感をたたえた一個の総体を形づくっているからだ。⁽¹⁸⁾

このように述べたあと、ボードレーは次のように断言する。「一時的で、うつろい易く、かくも頻々と変貌をとげるこの要素を、あなたがたは軽蔑する権利もなければ、これなしですます権利もない」⁽¹⁹⁾。引用に見られる「そこに含まれるかもしれない不可思議な美しさを、抽出して見せるべく骨折る」態度は、カントの言うところの「怠慢」に呼応するだろう。また、カントの啓蒙と同様に、引用文からは、他の時代が「今」とは異なり、時代に即した美、その時代が「現代」であった時に即した美のあり方があるのだという、「現在」と「過去」を差異化させる視点がある。ただし、フーコーも注意を促しているように、この現代性の態度は、過ぎ去る「今」を、永遠化、神聖化するようなものではない⁽²⁰⁾。さらに深くみていこう。

(b) 自己自身の自律的な主体の構成

再三述べているように、カントの「啓蒙」は「自ら考えること」を重視する態度である。しかし、それは単に好き勝手に物事を考えることではない。「理性の公的・私的使用」の議論を思い起こそう。カントは、他者に服従しつつも、公的な場において、自由に、自ら考えることをこそ、「啓蒙」と呼んでいるのである。ボードレーもまた同様である。「現在」に目を向ける現代性の態度は、単に「流行」に「翻弄」され

ることで、新奇なものを収集して満足する「遊歩者」でもない。そこに「永遠の要素」を見出す「自律的な主体」を構成することこそが重要なのだ。

カントの「啓蒙」とは、「議論するな＝理性を使って考えるな(*räsoniert nicht!*)、……せよ」という絶対的な服従を求められる状況から、「好きなだけ、好きなことについて議論せよ、しかし服従せよ(*räsonniert, soviel ihr wollt, und worüber ihr wollt, aber gehorcht!*)」という状況への移行を意味する。これは、「理性の私的使用」のみで生活している状況へ、「理性の公的使用」を重ね合わせることに等しい。「理性の私的使用」、つまり、人が機構(*Machine*)の部品となり、これに相応しい仕方では理性を用いる立場を承認し、かつ、制限された自由のなかで、自律的に公的に議論する権利を持つということ、これが重要なのだ。

フーコーの言うように、啓蒙は、「意志」、「権威」、及び「理性の使用」の間にそれまで存在していた「関係の変化」だと定義される⁽²¹⁾。権力分析において、フーコーは自らの「権力概念」を「暴力」のような「強制的」なものではなく、行為を「制限・規定」し、かつ「可能にする」力であると把握していたが、ここでも議論はパラレルである。フーコーは「啓蒙とは何か」の中で、「議論せよ、しかし服従せよ」の「しかし(*aber*)」を、「しかし(*mais*)」ではなく、「そして(*et*)」と言い換え、半ば恣意的に「議論すること」と「服従すること」を等価なものとして把握している⁽²²⁾。これが意味するのは、人間の行動を制限する制度・統治の側面と、その中で自分がいかに行為するか、発言するかという戦略的・自律的な側面を、切り離しつつ、どちらかを超越的な力を持つものとして捉えずに、均一に捉えるフーコーならではの表現と考えることができるかもしれない。自己をとりまく複雑な権力関係の布置の只中で、自己自身によって見出される制限された「自由さ」においてのみ、議論は可能になるのである。箱田(2013)も、フーコーの啓蒙について、「自己の導き(意志)と他者の導き(権威)によって構成される自己が行う、己れの振る舞いのありようの問題化(既存の関係の変更)」⁽²³⁾であるとしている。

さて、他方のボードレールはどうだろうか。ボードレールの「現代性」の概念においても、新奇なものが何でも許されるというような奔放さはない。現代性は、フーコーも指摘しているが、「禁欲的」なものなのである。

フーコーが現代性を禁欲的であると捉えるのは、その態度が、過ぎ去る「現在」、「自分自身」を単に「あるがままに受け入れる」ことではないからである。現代性におい

て重要なことは、「現在」を、そうであるのとは違うように想像する熱情、「現在」を破壊せずに、「現在」を変形しようとする熱情なのであり、自己自身を「複雑で困難な練り上げの対象」とし、「問題化」することなのだ⁽²⁴⁾。フーコーは次のように言う。「ボードレールの現代性とは、「現実的なもの」に対する極度の注意が、その「現実的なもの」を尊重すると同時に侵害する自由の実践に直面しているような修練なのだ」⁽²⁵⁾。

フーコーの「啓蒙とは何か」では、決して完全に自由ではない「現在の自分自身」が、「現在」を、そして「自分自身」を、可能な範囲でアレンジ、変形しようというあり方は、カントの「理性の私的使用」に「理性の公的使用」を重ね合わせる態度と平行な関係にある。更に、ここから引き出せる帰結として、前節末尾で述べた、「現在」を永遠化する態度もここで否定される。「永遠化」して特権的なものを形成するのではなく、「尊重」しつつ、「変化」させることが肝要なのだ。カントの「啓蒙」が「未成年」から「脱出」することであるならば、ボードレールの「現代性」は、自己と現在との関係性を変化させることによる「単なる遊歩人」からの「脱却」なのだ。

かけ離れた時代で見出される二つの概念は、以上の三つの事柄を問題化するような態度として示される。フーコーは、これら二つの概念を結びつける上で、「再活性化(réactivation)」という言葉を用いている。決して同じ領域で語られたわけではない概念同士だが、「現代性」は「啓蒙」の「再活性化」として把握されるというのだ。この意味で、二つの概念はフーコーによって、「哲学的エートス」と呼ばれる。次節では、この「哲学的エートス」を整理しながら、「境界に立たなければならぬ」というフーコーの立場を抽出する。しかしながら、フーコーは「啓蒙とは何か」の最後に、これまでの議論の総括としてカントに帰るのだが、そこで興味深い言葉を述べている。次節ではこの言葉の分析も、多少踏み込んで論じてみたい。その言葉は以下の通りである。

私は、一体我々が成人になることがあるのかどうかわからない。私たちが経験してきた多くの事柄は、啓蒙の歴史的事実が我々を成人にはせず、我々はまだ成人にはなっていないのだと、思わせるものだ。⁽²⁶⁾

4. 境界に立たなければならぬということ、子供への回帰

フーコーが言う「哲学的エートス」には幾つかの特徴がある。それらの特徴は総じて、「境界に立つこと」として性格づけられると本稿は主張する。これまで述べてきた「啓蒙」と「現代性」の観点は、常に「現在」、「現在の自己」、「その可能な変形」に貫かれるものであったが、例えば、「啓蒙」をそれに賛同するかどうかの「恐喝」として考えたり、「ヒューマニズム」と混同してしまったりするのは、かえって啓蒙が本来的に持っている「今日」を「昨日」から差異化する、という性格を弱めてしまう。重要なことは、この「恐喝＝二者択一の問い」や、ヒューマニズムとの混同などのような「歴史的道德的混迷主義」から「逃れる＝脱出」することなのだ⁽²⁷⁾。

フーコーはこの二者択一からの脱出的な性格を明確に「限界的態度(attitude limite)」と呼んでいる。この態度は、「拒絶の態度ではない。外と内との二者択一を脱して、境界に立たなければならぬ。批判とは、まさに限界の分析であり、限界への反省なのだ」⁽²⁸⁾。

カントもボードレールも、フーコーとは異なるが、「限界・境界」を意識した思想家であった。カントは言うまでもなく「認識が超えることを諦めるべき限界」、「理性の限界」について考え、ボードレールは常に「伝統的な美」のあり方と「現代の美」について考えていた。要するに、「昨日」とは違う「今日」を定めようとして、その「境界」に立っていたのである。

フーコーの哲学的エートスは、更に二つの実践的特徴、「考古学的な方法」、そして「系譜学的な目的」を持っている。考古学的方法というのは、『知の考古学』で整理されたような、「現在の我々自身」が行うこと、言うこと、考えることの主体として構成されるようになった諸々の出来事を「歴史的調査」として行うことを指す。対して系譜学的目的とは、「現在の我々自身」が偶然的な存在であり、現在とは違った仕方、行い、発言し、考えることができるという可能性を調査するという意味で言われる⁽²⁹⁾。つまり、フーコーは、いかなる超越的な視点も持たず、恐喝から逃れ、自らを偶然的な出来事として把握し、現在の自分と、異なったあり方である自分との、「境界(frontières)」に立ち続けるという立場を取っているのだ。

しかし、前節末尾で見たように、フーコーは、我々は「啓蒙」されていないように見え、そして実際に啓蒙されるかもわからないと述べている。だからこそ、不断に再活性化される「哲学的エートス」が必要なのだ、という解答は理解できなくはない。

ただ、その観点で見れば、その「哲学的エートス」を再活性化させるためには、現在の我々が、「常に」、「未熟なもの」、「未成年」であるということを自覚する、という前提条件が必要ではないだろうか。ここにそ、カントにも、ボードレールのテキストにも共通して見られる「子供」への回帰とも考えられる点があるのだ。フーコーはどちらのテキストからもこの点を取り上げていない。

まずはカントの「啓蒙とは何か」に見出される「啓蒙」の条件としての「子供」を確認する。些細な点ではあるが、カントは同テキストにおいて、未成年の人間は後見人によって「歩行器(Gängelwagen)」のうちに閉じ込められていると述べている。そして、この歩行器が取り外されると、数回は転ぶかもしれないが、後に一人で歩けるようになる、というのだ⁽³⁰⁾。これを、はじめて一人で歩くことを学習する「子供」と同様のものとして考えられないだろうか。もちろん、「一人で歩く(考える)ことを学習しようとしている」という限りにおいて、この「子供」は完全な意味での未成年とは区別される。また、ボードレールも、「現代生活の画家」のIII節「世界人、群衆の人、そして子供である芸術家」において、現代性の特性として、「子供への回帰(retour vers l'enfant)」、「再び見出された幼年期(l'enfance retrouvée)」をあげている。子供はあらゆるものを「新しさ」のうちに把握し、「生き生きと感ずる能力」を備えている、とボードレールは説く⁽³¹⁾。フーコーは「現代性」に「ダンディズム」の性格を見ていたが、実際のところ、ボードレールが、現代性の人であると賞賛するギース(G氏)にはダンディズムの性格を認めていない。「ダンディとは無感動の境地を希求するものであり、この点から言うと、飽くことを知らぬ情熱、見ること感じることの情熱に支配されるG氏は、ダンディズムからかけ離れるところ激しいものがある」⁽³²⁾。言うまでもないが、ここでいう「子供」とは生物学的な幼児のことを指しているわけではない。ギースは老年でありながら、ボードレールによって「大人=子供(homme-enfant)」として捉えられている⁽³³⁾。

「一人で自律的に考える」ことも、現在を注視し、これを「変形させる」ことも、それをしたことのない人間にとっては、言い換えれば、これまで他律的な仕方で行ってきた人間には、「初めてのこと」なのだ。啓蒙も現代性の態度も、「子供への回帰」を媒介にして「初めて」なされるのである。フーコーの「境界に立つ」立場には、すべてを曇らない目で偏見なく見つめる子供の眼差しを取り戻した、マージナルな「大人=子供」になる必要があるのだ。

註

- (1) Michel Foucault, *Dits et écrits ; tome 2 : 1976-1988*, Gallimard, 2001, p.1381-1397 (邦訳『フーコー・コレクション 6 生政治・統治』小林康夫／石田英敬／松浦寿輝＝編、筑摩書房、2006 年、p.362-395) 以下、DE2 で表記する。
- (2) DE2, p.1393 (邦訳 p.385)
- (3) Immanuel Kant, *Was ist Aufklärung?, Ausgewählte kleine Schriften*, Felix Meiner Verlag, 1999, p.20-27 (邦訳『永遠平和のために／啓蒙とは何か』他 3 編』中山元訳、光文社古典新訳文庫、2006 年、p.10-29)
- (4) Charles Baudelaire, *Œuvres complètes II*, Gallimard, 1976, p.683-724 (邦訳『ボードレール批評 2』阿部良雄訳、筑摩書房、1999 年、p.149-216)
- (5) Kant(1999), p.22 (邦訳 p.15)
- (6) Ibid., p.23 (邦訳 p.16-17)
- (7) この件に関しては、阿部良雄『シャルル・ボードレール【現代性の成立】』、河出書房新社、1995 年、p.39 及び、横張誠編訳『ボードレール語録』、岩波書店、2013 年、p.17 を参照。
- (8) Baudelaire(1976), p.694 (邦訳 p.168)
- (9) 阿部(1995)、p.39 ただし、宮川(1964)のように、「単なる価値概念とともに様式概念としての把握がボードレールのモデルニテをかつてないほど整合的な、それゆえに強烈な現代(同時代)の主張たらしめたものにほかならなかった」とする立場もある。宮川淳『近代と現代』『宮川淳著作集 III』、美術出版社、1981 年、p.61 を参照。
- (10) Baudelaire(1976), p.685 (邦訳 p.153)
- (11) 阿部(1995)、p.25
- (12) 宮川淳『絵画における近代とはなにか』(1962)『宮川淳著作集 III』、p.50
- (13) 湯浅博雄『応答する呼びかけ 言葉の文学的次元から他者関係の次元』、未来社、2009 年、p.18
- (14) DE2, p. 1387 (邦訳 p.373-374)
- (15) Kant(1999), p.21 (邦訳 p.13)
- (16) フーコーは、「啓蒙とは何か」に先立つコレージュ・ド・フランスで 1982-1983 年度に行われた講義の初日(1983 年 1 月 5 日)に、カントがフランス革命をどう捉えていたかを「啓蒙」との関連で分析している。ここでは書ききれない問題なので、この検討は後日に譲る。以下を参照。Michel Foucault, *Le gouvernement de soi et des autres, Cours au Collège de France. 1982-1983*, Hautes études, Gallimard/Seuil, 2008, p.3-24 (邦訳『ミシェル・フーコー講義集成 12 コ

レージュ・ド・フランス講義 1982-1983 年度 自己と他者の統治』阿部崇訳、筑摩書房、2010 年、p.3-27)

- (17) Baudelaire(1976), p.494 参照。ただし、横張(2013)も指摘しているように、「現代生活の画家」では、「現代生活の英雄性」に登場するフロックコートの例も燕尾服の例も一切ない(横張(2013), p.118)。
- (18) Baudelaire(1976), p.694-695 (邦訳 p.169)
- (19) Ibid., p.695 (邦訳 p.169)
- (20) DE2, p.1388 (邦訳 p.377)
- (21) Ibid., p.1383 (邦訳 p.367)
- (22) Ibid., p.1384 (邦訳 p.369) 正確には、フーコーはカントの言葉を「服従せよ、議論するな(Obéissez, ne raisonnez pas)」, 「服従せよ、そしてあなたは好きなだけ議論してもよい(Obéissez, et vous pourrez raisonner autant que vous voudrez)」としている(残念ながら、都合上、フーコーが参照したかもしれないカントの「啓蒙とは何か」の仏語訳を参照することができなかった)。なお、「権力」と「暴力」の差異が明確に語られるテキスト・研究としては、以下を参照。DE2, p.1055 (邦訳『ミシェル・フーコー思考集成 IX』 蓮實重彦ほか訳・編、筑摩書房、2001 年、p.24-25)、萱野稔人「フーコーの方法-権力・知・言説」(『権力の読みかた 状況と理論』、青土社、2007 年に所収)
- (23) 箱田徹『フーコーの闘争 〈統治する主体〉の誕生』、慶応義塾大学出版会、2013 年、p.212
- (24) DE2., p.1389 (邦訳 p.378-379)
- (25) Ibid., p.1389 (邦訳 p.378-379)
- (26) Ibid., p.1396 (邦訳 p.392)
- (27) Ibid., p.1390-1392 (邦訳 p.380-385) 参照。
- (28) Ibid., p.1393 (邦訳 p.385)
- (29) Ibid., p.1393 (邦訳 p.386) 参照。
- (30) Kant(1999), p.20 (邦訳 p.11)
- (31) Baudelaire(1976), p.690 (邦訳 p. 161)
- (32) Ibid., p.691 (邦訳 p.163)
- (33) Ibid., p.691 (邦訳 p.162)

所属(神戸大学人文学研究科博士課程／京都市立西京高等学校)